〔研究ノート〕

清末留日学生の手による雑誌『教育』について

龔　穎（倫理文化研究センター特任研究員）

はじめに

1911 年の辛亥革命、即ち武昌蜂起に端を発する諸情勢によって、清王朝が滅亡した。この狭義の辛亥革命以前に、中国の内外で発刊された新聞や雑誌が多くあって、革命の宣伝役を果たした。おおよその統計によれば、新聞が 67 タイトルを超え、雑誌は 49 タイトルを超えたものがあった。その中には、新聞の場合、中国国内 34、国外 33 でほぼ同数であり、雑誌は国内 18、国外は 31 であり、特に東京が 24 とおよそ半数を占め、留日学生の活動が、この時期の革命運動、とりわけ啓蒙的活動の中で高い比率を占めていたことがうかがえる。さらに刊行年別でみると、1903 年前後と 1906・1907 年にピークに達して、1908・1909 年には低調期をむかえるが、その後 1911 年に向けて上昇傾向に転じている。

それらの雑誌の中には、1906 年に東京で三人の留学生の手によって発刊された『教育』という、正式に 2 号しか出せなかった、とても短命な月刊誌がある。当時においては、留学生の企画で発刊された雑誌が多く見られるが、準備段階でダメになってしまったものもあったし、また創刊号しか出せなかった雑誌もあった。それらの雑誌と比べれば、『教育』はまだ幸運だと言えるかもしれない。正式に 2 号まで出版されたが、第 3 号の目録が予告されたため、3 号目の予定掲載文章がある程度まで分かる。畢竟、これで雑誌『教育』がその足跡を歴史に残すことができ、その豊かな内容と個性に富む執筆者たちの名前と文章も後世に伝えられるようになったのである。ただし、この短命さにも関係するのか、今まではこの雑誌に関する纏まった研究がまだ見当たらない。よって、この月刊誌の思想内容、編集者・執筆者の経歴ないしその流通ルートなどの周辺情況を含めて総括的な考察を行う必要があると思われる。

本稿は雑誌『教育』をめぐる下記のいくつかのことを調べ、現時点で得られる結果を報告することを目標とする。具体的にいうと、「1. 雑誌の概略」「2. 発刊者と執筆者」「3. 主な内容」ということである。これらの調査を通してこの雑誌の主な内容を把握すると同時に、明治末期の留日学生をめぐる日中知的交流の一端をより具体的なレベルで究明できるよう努めたい。